

- 22) 山本義丸(1958) 兵庫県氷上郡昆虫目録 県立柏原高等学校生物教室・柏原。
- 23) 神戸新聞社学芸部(1974) 兵庫探検・自然編 神戸新聞社・神戸。
- 24) 日浦 勇(1978) 蝶のきた道 蒼樹書房・東京。
- 25) 藤澤正平(1983) ギフチョウとカンアオイ ギフチョウ研究会・飯山。
- 26) 日高敏隆他(1984) 日浦勇著作集 大阪市立自然史博物館友の会・大阪
- 27) 渡辺康之(1985) ギフチョウ 文一総合出版・東京。
- 28) 浅沼昌平他(1986) 岡山県のチョウ 倉敷市自然史博物館・倉敷。
- 29) 遠山 豊他(1989) 北摂の蝶 大阪昆虫同好会・宝塚
- 30) 兵庫県生物学会但馬支部(1990) 但馬の自然 神戸新聞総合出版センター・神戸。
- 31) 細見末雄(1992) 丹波草木誌 丹波自然友の会・福知山。
- 32) 山陰むしの会(1994) 山陰のチョウたち 山陰中央新報社・松江。
- 33) 丹波自然友の会(1995) 丹波の自然 神戸新聞総合出版センター・神戸。
- 34) 難波通孝(1996) 岡山の蝶 山陽新聞社・岡山
- 35) 渡辺康之(1996) ギフチョウ 北海道大学図書刊行会・札幌。

チュンペリーの見た日本の昆虫

大貝 秀雄

昆虫愛好家の間で植物学者チュンペリー(Carl Peter Thunberg, 1743-1823)の知名度は必ずしも高くはないと思われる。リンネの直弟子であった彼はアフリカ希望峰での3年間にわたる学術探検により新属新種の多数の植物を発見したのち、ジャワを経て1775年、当時鎖国の最中であった日本にオランダ商館医の資格で入国した。目的は日本に産する生物、特に植物相の解明であった。

長崎ではほとんどの時間を狭い出島に幽閉されて不自由な思いをしながらも、あらゆる手段を講じて植物標本の収集に努めた。その様子は彼の書いた旅行記(日本語版は山田珠樹による抄訳「ツンベルグ日本紀行」)に詳しく述べられている。そして翌年3月4日から6月25日までオランダ商館長の江戸参府の旅に随行する機会を得た。この旅もほとんどは船か駕籠の中での移動を強いられたが、それでも彼にとって日本の植生に関する理解を深める上で絶好の機会であった。特に箱根の山越えではかなりの行程を駕籠から降りて歩くことができ道中で多くの植物を採集したという。また途中

で宿泊した宿屋の庭や江戸における逗留先での採集機会も少なくなかったに違いないし、江戸からの帰路は往路に比べてずっと自由を許されたと彼は書いている。同年12月3日に日本を出港した彼は、故国スウェーデンに戻った後、精力的に採集品の研究を進め、その集大成としての“Flora Japonica(日本植物誌)”ほか多くの論文を残した。

このようにしてなされた研究成果によって彼は日本の植物学の基礎を築いた学者と評価され、日本のリンネとも呼ばれている。しかし一方で、彼は動物学にも深い造詣を示して多数の収集品を日本から持ち帰り自ら研究論文を発表している。例えばハンミョウ *Cicindela chinensis japonica* Thunberg(以下T.と略す)1781, リンゴカミキリ *Oberea japonica* (T.1787), ヒメカメノコテントウ *Propylea japonica* (T.1781)., ヤマトシリアゲ *Panorpa japonica* T.1784, ヘビトンボ *Protohermes grandis* (T.1781)などは日本で採集された標本に基づいて彼自身が記載した昆虫として代表的なものである。また彼の旅行記には彼が日本で確認したとい

う昆虫97種のリストが他の動物名とともに記されている。さらに晩年になって“Fauna Japonica(日本動物誌)”の名で2冊の冊子が刊行され、そこでは先のリストに加え、あらたに16種の昆虫の名が挙げられた。

これら種名リストに出てくる昆虫は分類群では鞘翅・鱗翅・半翅・双翅の4目が大多数を占めている。しかし他にもチャバネゴキブリ・ヒトノミ・ヒトジラミ・シミなどの名も認められ、彼が確認することのできたありとあらゆる昆虫または昆虫的なもの(ヤスデやカニも昆虫の項目に入れられている)が網羅されているように見受けられる。しかしひとつ困った問題があった。それは彼が記録した学名が、現在我々の知っている虫のどの種に対応するのか判断のつかないケースが余りにも多い点である。なぜ判断できないかということ、例として2種のみがリストアップされているトンボの場合で説明してみよう。

2種のトンボの名は *Agrion puella* と *Agrion virgo* である。まず *Agrion* というのはもともと均翅類全体を指す属名としてリンネが設定したものであったのだが混乱の歴史があって現在は廃止されている。当時の *Agrion* は今では多くの科属に分割され、*Agrion puella* はイトトンボ科の *Coenagrion puella* (L.) に *Agrion virgo* はカワトンボ科の *Calopteryx virgo* (L.) に変わっている。そしてこれら両種はどちらもヨーロッパの普通種ではあるが日本には全く産しないものなのである。つまりチュンペリーは彼が立ち寄った日本のどこかで或る種のトンボを見て、それを故国で彼が見知っていた別のトンボと同一種であると信じてしまったのに違いない。ただ幸いなことにはトンボの場合には比較的情報が豊富であるためヨーロッパ産の種の名前から日本でチュンペリーが見て誤同定したトンボの種名をほぼ確実に特定することができる。

答えを述べると *Coenagrion puella* に相当するのはセスジイトンボ *Cercion hieroglyphicum* (Brauer) であり、*Calopteryx virgo* の方はハグロトンボ *Calopteryx atrata* Selys に違いなかったと思われる。彼の日本での行程が北は江戸までであったという条件を考慮すれば、セスジイトンボ

の他にオオイトトンボ・ムスジイトンボの可能性もあるし、*Calopteryx* の種としてアオハダトンボも有力候補であり得る。実際、かつては日本のアオハダトンボの学名に *Calopteryx virgo* (L.) が用いられていた時代もある。けれども彼の行動範囲が極端に限定されていたことを重視すれば、先に示した二つの種が、それらが類似種群の中でも特に普通に分布するものであるが故に、極めて妥当性の高いものだと考えるべきであろう。

彼の昆虫の記録は大体そのようなものであって解説には骨が折れる。彼が新種と認めて命名した昆虫の場合はまだましである。それでも彼が日本からの帰路に立ち寄ったジャワ島・セイロン島などでの採集品を日本産と誤認して *japonica*・*japonicus* の小種名をつけてしまったと思われるケースも少なからず認められるので注意が必要である。

しかしながら筆者にはチュンペリーの昆虫に関する業績をけなす意図は毛頭ない。現在の学名との対応が困難であるという点は、彼の記録に限った問題ではないし、ましてや彼になんら責任があるわけではない。むしろ彼は当時のレベルとしてできる限りのことを極めて誠実に実行したのだったに違いない。また長距離の航海それ自体がまだ生命を脅かす危険に満ちていた時代にあって7年に及ぶ大探検旅行をなし終えた彼の荷物の中にくつつかの置き間違いか勘違いがあったとしてもやむを得なかったのではあるまいか。更につけくわえるならばチュンペリーの日本滞在中、特に出島の外にあつては彼は常に多数のお供の日本人の役人達につきまとわれていたのであって、捕虫網など携行できるはずもなく、素早く飛翔するトンボやチョウを容易に捕らえることが可能であったとは信じられない。おそらく止まっている姿を見ただけで同定・記録せざるを得なかった種が大部分だったのではなかろうか。

次にチュンペリーの Fauna Japonica 正統二篇中に記されている昆虫のうち比較的“同定”の進んでいるチョウの一覧表を挙げ (Table 1、トンボも併記)、そこに含まれている種について簡単に解説して本稿を閉じることにしたい。

蝶とみなされるものは全体で11種あり、すべて

が *Papilio* の属名で記されていた。2種のトンボがともに *Agrion* とされていたのと同様、リンネの時代にあらゆる蝶は *Papilio* の1属に含められていたらしい。したがってチュンベリーが見た種を推理するに当たっては当時から既知種であったことと原記載の属名に *Papilio* が使用されていたことを重視した。

まず *Papilio argiolus* をルリシジミ、*P. rapae* をモンシロチョウ、*P. Hecate* をキチョウ、*P. Phlaeas* をベニシジミ、*P. Cardui* をヒメアカタテハとそれぞれ現在の学名通りに判断することに特に問題はないと思われる。その主な理由は、これらの種がどれも現在、少なくとも西日本の低地では普遍的に見られる点にある。たとえばルリシジミについて考えると、本種と同様に普通種であるヤマトシジミやツバメシジミもチュンベリーが観察した可能性は極めて高い。そしてヤマトシジミを見てルリシジミと誤同定してしまったということも十分に考え得ることではある。しかしたとえそれが事実であったとしても本物のルリシジミを彼は必ず見ていたはずであり、それをも彼はルリシジミと認識していたに違いない。したがってチュンベリーの記録した *P. argiolus* はルリシジミを指していると結論づけられる。

Papilio C. album をシータテハ *Polygonia c-album* (L.) ではなくキタテハ *Polygonia c-aureum* (L.) とみなしたのは *Agrion virgo* をハグロトンボとしたのと同様の考え方による。即ち、より普遍的に分布しチュンベリーの目につきやすかったに違いないキタテハ、それも秋型をシータテハと誤同定したものと思われる。春先の長崎近郊の丘陵地で漸く外出を許可されたチュンベリーが腰を屈めている。その目の前に越冬から醒めた一匹のチョウが羽を拡げて体を暖めている。手を延ばせばたやすく捕らえられそうに見えるのに、それは一瞬早くビュッと飛び去るのだ。そして溜息をつきながらも喜びに輝いた顔の彼の姿が目には浮かぶようである。その時に彼の前にいた蝶は西日本の低地には分布しないシータテハであったはずがない。外見はそれとよく似たキタテハの秋型だったはずだ。

次の *Erionata thrax* (L.) はフィリピンなどに分布する大型のセセリチョウだが、それに比べれ

ばかなり小型で九州以南に産するクロセセリとよく似た斑紋をもつ。長崎近郊であれば彼がクロセセリを目撃した可能性は十分に想定できるので、当時リンネにより既に命名されていた東南アジアの蝶とクロセセリが同一種であると信じて彼がその名を記録に書き留めた可能性は高い。

P. Proteus を *Papilio protenor* のミススペルとみなすのは少々無理があるようにも思えるけれども、実はそれには裏付けがある。*P. Protenor* の記載は中国産の標本に基づいて1775年になされているが、その7年後には日本産亜種 *P. protenor demetrius* Stoll も記載されているのである。後者について江崎博士は「Thunbergの採集品でオランダの学者によって研究されたと推定される」と述べている。ところが事実はそのようではなかったらしい。チュンベリーの来日より更に80年以上前に彼と同様に医者として長崎出島に滞在し日本の動植物を採集したケンペル(E. Kaempfer, 1651-1716)の持ち帰った標本が後に *demetrius* と命名されたものであったようだ(猪俣1986)。チュンベリーは先人としてのケンペルには特に深い関心を持っていたようで、筆者は未見であるが、「ケンペル注解」という日本産の植物に関する著作も残している。このケンペルが採集した日本産クワアゲハの標本は Leiden に現存すると言われており、一方ケンペルの他の多くの収集品は大英博物館に収められている。日本から帰国したチュンベリーは1778年末から翌年1月にかけて大英博物館にあったケンペルの標本を調べる機会をもったことが知られているし、彼はまた Leiden にも訪れているので、どちらかの場所でケンペルのクワアゲハを実見した可能性もある。そうして自身が日本で目撃した種が、その標本と同一であることを確認したのだったかも知れない。少なくともその時点では日本産亜種 *demetrius* はまだ命名されてはいなかったのだ。

P. Niphe は後に *Argynnis niphe* (L. 1767) と改められ、更にその後 *Argyreus hyperbius* (L. 1763) ツマグロヒョウモンと同物異名であることが判明したものである。

P. brassicae は *Pieris brassicae* (L.) オオモンシロチョウである。この蝶は最近になって北海道と東北北部に侵入・定着したと推定されるもので、

もちろんチュンベリーが日本でこれを見た可能性はない。ひとつの解釈としてスジグロシロチョウ夏型の誤同定ということも考えられなくはない。しかしながら今は詳述を避けるけれども別の問題点があり、ここでは本種が日本での実際の記録に基づいたものではなかった可能性が高いと言うにとどめておく。

順不同になったが最後に *P. Ascanius* についてコメントしておきたい。この名 (*P. ascanius* Sparrman, 1768) は現在用いられておらず、*Pachliopta aristolochiae* (Fabricius) ベニモンアゲハの忘れられた名 (nom. *oblitum*) である。しかしもちろん、当時の長崎近郊においてもベニモンアゲハが目撃されたとは信じられない。誤同定された可能性がある種はモンキアゲハとナガサキアゲハ位のものであろうが、翅斑や翅型の特徴からまずモンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens* Butler の春型であったと判断して間違いのないと思われる。しかし何と皮肉なことか。もしそれが仮にナガサキアゲハだったとすればそれこそ当時未記載であり、後輩に当たるシーボルトにより後年 *Papilio memnon thunbergii* von Siebold とチュンベリーの名をとって命名されることになった種であったのだ。結局チュンベリーは日本産の蝶を一種も命名することはなかった。

(付記)

Table 1 に示した種と同程度もしくはそれ以上に西日本の低地で普通に見られ、当然チュンベリーもまじかに接するチャンスがあったと思われるにもかかわらず記録されていない多くの種がある。例えばイチモンジセセリ・ナミアゲハ・ヒメウラナミジャノメ・コムシジなどである。またトンボならシオカラトンボやアカトンボ類 (*Sympetrum*)。これらの種を何故チュンベリーは記録に残さなかったのか、二通りの理由が考えられる。ひとつは目撃したものと非常に類似した複数の種が当時すでに既知であって、それらのうちどの種に相当するのか判断できなかったために記録しなかったケース。もうひとつは当時の既知種のいずれとも一致しない特徴を持つことに彼が気づき、未記載種であることを知ったけれども、標本を得ることが

できなかったがために敢えて記録に残さなかったケースである。どちらのケースであっても、これら記録の欠如という事実そのことがチュンベリーの博物学者としての誠実さを証明しているように思われる。

<参考文献>

- d'Aguilar, J. et al. (1986) A field guide to the dragonflies of Britain, Europe and North Africa. Collins, London.
- Leech, J. H. (1892-1894) Butterflies from China, Japan and Korea (復刻版)
- Smart, P.: 白水隆訳(1978) 世界蝶の百科. 秀閣社.
- Thunberg, C. P.: 山田珠樹訳注(1928) ツンベルグ日本紀行. 東京駿南社.
- Thunberg, C. P. (1822) Fauna Japonica. (ツンベリー研究資料, 1953中の複製).
- Thunberg, C. P. (1823) Fauna Japonica, Continuata. (ibid.).
- 猪俣敏男(1986) 大図録日本の蝶. 竹書房.
- 江崎梯三(1953) "ツンベリーと動物学" ツンベリー研究資料. pp9-16. 日本学術学会・日本植物学会.
- 環境庁(1995) 日本産野生生物目録. 自然環境センター.
- 白水隆(1997) "1996年の昆虫界をふりかえって, 蝶界" 月刊むし(315)3-7.
- 西村三郎(1989) リンネとその使徒たち. 人文書院.
- 日本蜻蛉学会編(1984) 波江: 日本蜻蛉図譜. 日本蜻蛉学会.
- 浜田康・井上清(1985) 日本産トンボ大図鑑, 第2巻解説編. 講談社.

表 1. Fauna Japonica に記録された昆虫名と現在の学名の対照 (蜻蛉目および鱗翅目のうちチョウ類)

Fauna Japonica に記された名	左の名に相当する現在の学名	チョンベリヤーが実際に見たと推定される日本産の種 ¹⁾
Agrion puella	<i>Coenagrion puella</i> (L. 1758)	<i>Cercion hieroglyphicum</i> (Brauer, 1865) セスジイトトンボ
Agrion vigo ²⁾	<i>Calopteryx virgo</i> (L. 1758) ヨーロッパアオハダトンボ	<i>Calopteryx atrata</i> Selys, 1853 ハダグロトンボ
Papilio argiolus	<i>Celastrina argiolus</i> (L. 1758) ルリシジミ	同左の日本産亜種 <i>C. argiolus ladonides</i> (de l'Orza, 1869)
Papilio rapae	<i>Pieris rapae</i> (L. 1758) モンシロチョウ	同左の日本産亜種 <i>P. rapae crucivora</i> (Boisduval, 1836)
Papilio C. album	<i>Polygonia c-album</i> (L. 1758) シータテハ	<i>Polygonia c-aureum c-aureum</i> (L. 1758) キタテハ (秋型)
Papilio Thrax	<i>Erionata thrax</i> (L. 1767) バナナセセリ属の種	<i>Notocrypta curvifascia curvifascia</i> (C. et R. Felder, 1862) クロセセリ (?)
Papilio Hecate ³⁾	<i>Eurema hecabe</i> (L. 1758) キチョウ	同左 <i>E. hecabe</i> (L. 1758)
Papilio Proteus	<i>Papilio protenor</i> Cramer, 1775 クロアゲハ	同左の日本本土亜種 <i>P. protenor demetrius</i> Stoll 1782
Papilio Ascanius	<i>Pachliopta aristolochiae</i> (Fabricius, 1775) ベニモンアゲハ	<i>Papilio helenus niconicolens</i> Butler, 1881 モンキアゲハ (春型)
Papilio Phlaeas	<i>Lycæna phlaeas</i> (L. 1761) ベニシジミ	同左の日本産亜種 <i>L. phlaeas daimio</i> (Matsumura, 1919)
Papilio Cardui	<i>Cynthia cardui</i> (L. 1758) ヒメアカタテハ	同左 <i>C. cardui</i> (L. 1758)
Papilio Niphe	<i>Argyreus hyperbius</i> (L. 1763) ツマクロヒヨウモン	同左の日本産亜種 <i>A. hyperbius hyperbius</i> (L. 1763)
Papilio brassicae	<i>Pieris brassicae</i> (L. 1758) オオモンシロチョウ	? ?

1): 日本産種の学名は「日本産野生生物目録」によった
 2): 「ツンベルグ日本紀行」では *virgo*
 3): 「ツンベルグ日本紀行」では *hecabe*